女装天女！

フィサリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女装天女！

【Ｎコード】
Ｎ５５８７Ｙ

【作者名】
フィサリア

【あらすじ】
「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨！」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップスティックアクションコメディ。

ＦＣ２小説に掲載しているものです。

長編ですので、どうか気楽にゆっくりとお楽しみください。

二代目

全身が楽にうつる大きな鏡の前に洋一は立った。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。

そしてウィッグ。

それらは全て女物だ。

ゴクリとのどが鳴った。

ーーーーー　今なら引き返せる、やめろ、やめるんだ！

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

ーーーーー　なんでヤクザの俺がこんなことに・・・・・・

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まった。

彼は幽姫洋一（ゆうき・よういち）３０歳。
この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その二代目と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがって、銀河鉄道の某美人もうつむいて泣き崩れるといわれるくらい美しい眼と身体をした、母・凛にそっくりだった。

そのせいでやたらとモテた。女性はもちろん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。
鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。
そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期二代目と言われるようになっていた。
持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これからの彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせいじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るという組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代目、ごくろうさんっス！」
「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行っても目につくらしい。
道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。
洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。
盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。
照明に照らされたアーケードの中は、人っ子ひとりおらず、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。
洋一のなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。
ーーーーー　やっと独りになれた・・・・・・・
さっきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をうるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。
ーーーーー　どうしてこうなっちゃったのかなぁ・・・・・・・・・
うつむいて歩きながら、独りになるといつも考えることをまた心の中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても繊細で華奢な心の持ち主だった。
学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。
おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。
むらがる女の子たちに対応しているうちに、無類の女ったらしと噂

されるようになり、いやらしい目で言い寄ってくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになった。
全てはふりかかってくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつがえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巌を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたくったような父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。
ーーーーー　イヤだ！絶対にあいつみたいになりたくない！
しかし、彼はヤクザである。
同類、それも組織経営なら親をもしのぐとさえ言われていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈ってある髪ーーーーー本当は綺麗で細く明るい栗色の髪だったーーーーーをガリガリとかいた。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い浮かべる。
ーーーーー　あぁ、かあさんはやっぱすごいなぁ、カンペキだ・・・・　なんであいつなんかと結婚したんだろう

ここで彼の為に断っておくが、洋一はいわゆる世間でいうマザコンではない。
母である凛は、女性と言う偶像を極めた存在ではあったが、立派な社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精神的に近づけたりはしなかった。
だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粋に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持ちでもって、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがった年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だったと思っていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。緯度、軽度共にまったくちがっていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならない。まぁ実際の話、生きていくのは楽勝でできるのだが、幸せとは程遠いクライムな世界でこれからもやっていくのかと考えると、気がどんどん滅入ってくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。
ただ行き詰まり感だけがあった。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとっくの昔に済ませてあるし、だいたい３０でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

ーーーーー　どうしてこうなっちゃったかなぁ・・・・・・・・
結局、この問いに戻ってくるという無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったので、まともにぶつかってしまった。
急に自分の懐に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいものを着ていた。女の子のようだった。

突っ込まれたわき腹が痛かったが、ヤクザモードでないときの彼は優しい。
どなりもせず、彼女の肩をそっとつかむと、
「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「ごめんなさい、すみません！」
彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去っていった。
あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のするどい頭脳はすでにうごき始めていた。
ーーーーー　あれ・・・　なんか声低くなかったか？　それに肩もえらくがっしりとしてたような・・・・・・

５秒で答えは出た。
ーーーーー　あっ！　男！？
正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきているという、女装の男、女装子というのに当たったらしい。
夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一にぶつかってしまったようだ。

めずらしいものを見た気分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸・・・・・・　いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

ーーーーー　なんだ？

思わず足を止めてしまうと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

ーーーーー　ど、どうしたっていうんだ、俺！？

訳がわからず目を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中で、存在を誇示するようにチャラッとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのエントランスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上がると、扉を開けて部屋に入る。

玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいざなうようにパッとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそっと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこにでもある小洒落た部屋だった。

これまでもここへは何度もやってきていた。

別に母を偲ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りっきりになれる場所だったからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろった寝室が映し出された。
母・凛はすべてを置いて、この部屋を出て行ったのだった。

理由は知らない。
実は大雑把で豪快なところがある凛なので、面倒で身一つで去ったのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になって鏡の前に立ってしまったのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。

自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかった。
あの女装子に突き当たってから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまったからだ。
ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はっきりとわかっていた。
とまどっているのは、それを認めたくないだけなのだ。
その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

すーっと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畑だった。
洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンッと跳ね上がった。
そして視線が己の股間へと向けられる。
そこにあるよう洋一自身ーーーーーー彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいたーーーーーは、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかった。

ーーーーー　なんだ？　俺は心の病なのか！？
そうでもあるし、ないともいえよう。

とまどう心とは別に手は着々とまたうごき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。
そして絶対に合う訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に目は、さきほどの女装子が着ていたようなメイド服を探している。
しかもあるはずがないそれが、なぜかあった。

ーーーーー　か、かあさん・・・・・　あなたっていう人は・・・・・・・・・・
息子の将来を見通していたかのようなチョイスであった。
遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまったが、それはまったくの方向違いだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そっとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらいの偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウィッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した己の姿を洋一は、張り裂けそうなくらい鼓動している胸を押えながら、鏡に映してみた。

化粧をしていないのでさすがに違和感があったが、意外と見苦しくない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさない身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被ってきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

しばらくそうして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、目を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

ーーーーー　あぁ・・・・　もうそのくらいにしてぇ・・・・・・！

そう胸中で叫んだが、再び火がついた心は許してはくれない。

というか、すでに語尾が女性化している。
高校時代にビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリヤリやらされていたので、化粧方法がわかっていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もしっかり残していってくれていたので、あっという間に顔ができあがる。
「あっ！」
自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。
双子とはちょっと言いすぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。
さっきまであった、ウィッグや服とのズレがかなりなくなってきている。
これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになって初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗ってアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちりと大きく広がって見え、つけまつ毛など必要ない。
しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらないくらいだ。
元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーツ一つ一つをうまく演出している。
とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているように、輝きを放っていた。

「あ・・・・・・」
ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に気を失ってあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクス的転換に耐え切れなくなったようだった。だが数秒でガバッと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声がしていたが、洋一は夢中で気がつかなかった。

シン

「おはようございます！」
「ごくろうさんっス！」

事務所にはいると、ドスの効いた声や妙に甲高い声の合唱が洋一を迎えた。
無言で挨拶を受けながら、個室となっている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかりとデスクに陣取った。

結局あのあと、ゴミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。
そしてベッドに倒れこんでさっきまで寝ていたのだが、身体がまだだるい。
一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。
一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやってきたが、すぐに帰るつもりだった。

一時間ほどここで時間をつぶしてから出ようと考えたところで、また恥骨の辺りがソワソワしはじめた。
うっと思わずうめき声が出て、洋一はあわてて口に手をやる。
ーーーーー　一晩だけって約束だったのに・・・・・　なんでまたあそこにいこうとしてるんだ、俺？
いったい誰にそんな約束事をしたというのだろう。
しかもこのセリフの４０％ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗がおおったとき、ドアがコンコンと控えめにノックされた。
瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいれ！」
「失礼します」
組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。
洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・冴島（さえじま）　心（しん）だった。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」
そういって冴島は、馥郁な香り漂うカップを、音も立てずに洋一の目の前に置いた。
「おっ、ありがとよ」
こう答えてカップに手をのばすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。
ーーーーー　うまい・・・・・・・　やっぱシンの淹れてくれた紅茶は一味ちがう
目を閉じてそう洋一は思った。

シン。
二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。
そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。
急いでまた断っておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。
今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。
いくら言ってもみんな自分のことを「二代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を旨く淹れてくれなかったが、シンは違う。
それに言葉遣いも丁寧で優しく、不必要に語尾のあたりに、ッとかスをつけないところも気に入っている。
つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていない男。

それがシンだった。

ちらっと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のように謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立っている。
そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サッとすぐに一歩で前に出てこれるという絶妙なポジションだ。
近いのに主の目の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。
いったいこの男はどこで、こんな技術を学んだというのだろう。

洋一がカップをソーサーに戻すと、すっと新聞が置かれる。
左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。
だが、シンは火をつけはしない。
洋一が自分でつけることを好むからだ。
新聞から目を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。
そこには必ず灰皿があるからだ。
おまえはドラえもんか、と突っ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。
そう、それが冴島　心であった。

「シン、おまえうちに入って何年になった？」
今日も満足して、洋一は優しくそういった。
「三年になります、兄貴」
はっきりとはしているが、ドスを控えた慇懃な声でシンがこたえる。
「そうか・・・・・・　ずいぶんともう見習いも長いな」
シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクッと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げてくる。

博打を経営させれば、まっとうなギャンブルにしてしまい、利益が上がらない。

かといって女をだますことなどできっこないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしいことといえば、ずっとやってきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるということができない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やっぱりボディガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではとても生きてはいけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおう、そう彼は決めていたが、シンがいなくなった後のことを思うと、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考えを見透かしたように、シンが心のこもった声でいう。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「・・・・・すまんな」

「いえ、それが本心ですから・・・・」

ええやっちゃなぁワレ、とニセ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行った。

ふーっと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんなぁ。シンには似合わないよ

な・・・・・・・」
小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。
本皮を張った椅子が、キュッと小気味よい音をたてて、彼を包み込んだ。

彼女たち

ジリリリリーン！　ジリリリリーン！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃーん、今夜ヒマぁ？」

「おぉ、あ・・・・・」

空いてると言おうとしたとき、ちらりと母の部屋が脳裏をかすめ、口ごもる。

「あーぁぁぁ・・・・　あかんわ、仕事やねん」

「ちょっと！　その、あーの間と関西弁はなんなのよ」

甘ったるかった真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さっきテレビで観た芸人のしゃべりがうつっちゃって」

「・・・・・なんかあやしいね。洋ちゃんテレビきらいじゃん」

もっと声が低くなった。

バカで能天気なキャバ嬢なのに、こういうカンはなぜすぐ働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの女の人とかじゃないでしょうね？」

「バッカ、ちげーよ。なんでそうなるわけ？」

「だって、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわった気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼッタイかわった！好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わったというところは的を得ている。

洋一自身は決して認めないだろうが。

言いよどんだ洋一の耳に、殺気が送り込まれた。
「・・・・今から洋ちゃんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるから」
うっ、とうめき声がでそうになって、洋一はあわててケータイを遠ざけた。
顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畑の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもったことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。
なので、ぜひとも今は会いたくなかった。

ーーーーー　や、ヤバい！部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっといなきゃいけなくなる
そうなると、もうこちら側へは二度と戻ってこれない気がして、洋一はぞくっとした。

それにいつまでもシンの送迎を断るわけにもいかないから、マンションの存在も組にバレてしまう。
まだ初秋だというのに、まるでサウナに入っているように汗がドッと吹き出てシャツを張り付かせた。
「あはははは。まったくなにいってんだよ、おまえ。ちげーってば」
力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰って真子の誤解をとこうか。
しかし、妙にカンだけはいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまうかもしれない。
そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ちょい仕事まで時間あっから、今から会おうぜ」
「・・・・・」
「なんだよ、まだうたがってんの？しょうがねぇなぁ・・・　じゃ、

これから信じられるようにしてやるよ」
これから・・・・の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータイに吹き込んだ。
力技で行く気だ。
真子は野生児だけにエッチが好きだった。
「あ・・・　じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」
真子の声が一瞬で甘いものに戻った。
成功である。
洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。
「おお、早くこいよー。あと、シャワーは浴びずに、な」
「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」
エッチはてめぇだろうが、と心の中で突っ込んでおいてから、洋一は二言三言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょうか？」
急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒッと悲鳴をあげて飛びのいた。
「申し訳ありません・・・・・・　おどろかせてしまって」
「し、シン！　おまえ気配消しすぎだって！」
「失礼しました。お電話の邪魔かと思って控えておりましたので」
シンはそういって軽く頭をさげた。どことなくいつもより慇懃無礼な感じがした。
その仕草をみて洋一はハッとした。
ーーーーー　こいつ、電話の相手が真子ってことも、その内容もわかってやがる！
そう気がつくと、さすがに気味が悪くなった。
「車を回してきますから、少しお待ちください」
くるりと優雅にターンして、足早に去ってゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きっとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そう真剣に思うのだった。

洋一のテクニックをもってしても、真子を納得させるのに3時間もかかってしまった。
セックスは嫌いではなかったが、同年代の男より数多くこなしてきたし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなっていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふぅーっと息を天井へと吹きあげた。
「兄貴、どちらまで？」
ハンドルを握って、まっすぐに背を伸ばして座っていたシンが、そうたずねてくる。
洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になったまま真子が言ったセリフがよみがえる。
「今夜、洋ちゃんとこ泊まる。しばらく部屋にいるから」
彼女がそう言ったということは、洋一の作戦はミッションコンプとはいっていないらしい。
今夜部屋に戻らなかったら、真子は更に疑いをつのらせるだろう。

彼女一筋、と言うわけではまったくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだった。
まぁ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせてきているのだが。
いつも悪気の無い加害者と言うこのタチのよくない男は、さらに考

える。

ーーーーー　そもそもなんで俺は、自分の部屋に帰りたくなくってイライラしてんだ？

答えはすでにでている。

目をそらせたい事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。

もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨のあたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「・・・・・兄貴？　どうかなさいましたか？」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出ている二つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

ーーーーー　兄貴、真子さんとなにかあったのですが・・・・・

あんなに苦しそうなお顔になってしまわれて

洋一の揺れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じっと耐えて待った。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれば良き妻、そして良き母として立派であっただろう。

だが現実は、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝って、毅然と顔を上げて命令した。
「シン、部屋に帰る。車を出せ」
「わかりました」
車体を沈みこませず、するりとジャガーはすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」
洋一の住むマンションの駐車場でジャガーが止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。
「なんだ、妙な野郎でもいるのか?」
ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。ヒットマンなどいるはずもなかったが、いちおう職業柄そういってみた。
だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたかっただけである。

シンは何もこたえず、自分の唇に人差し指を立てて洋一に黙っているようにジェスチュアすると、さっとジャガーを降りて猫のように階段へと消えてしまった。
いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰って洋一にささやいた。
「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争ってます。どうやら鉢合わせしてしまったようで。いま上がられると不測の事態になるかと思いますので、ここは離れましょう」

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のＮｏ１ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。
ーーーーー　あいつは物分りはいいが、浮気は許さないやつだ。血の雨が降る・・・・・

「どうしましょう？水音さまのところにでもまいりましょうか？」
大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。
「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねぇ」
「・・・・・さすがです、兄貴」
彼女同士を激突させておいて、さすがもなにもないはずなのに、シンはそういって洋一をほめた。

「それではどこか部屋でもとりましょうか？」

そういって洋一の顔を見たシンが、あっとおどろいた。
ーーーーー　あ、兄貴が笑ってらっしゃる！

洋一自身も気がついていなかったし、またシン以外の者ではわからないくらいだったが、微妙に彼は笑っていた。
あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなって出てしまったのだ。
おどろきを表情に出さぬように苦心しながら、シンは洋一の言葉を待った。

「おまえはここで帰れ」
「はっ？」
「俺を降ろして帰れ」
「兄貴・・・・・・」
逃げずに二人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やっ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」

洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと言うと、きっちり９０。の礼をしてからジャガーに乗って去っていった。

車が完全に視界から消えた後、さらに１０分待ってから通りに出て確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去った。

お散歩

その夜、母のマンションに来た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。
そして今夜は黒を基調に白いエプロンが強調された、本格英国風ハウスメイドであった。

ーーーーー　母さん・・・・・　なぜあなたはこんな物を持ってたんですか？
１０年前といえば、東京は秋葉原でようやくメイドブームが隆盛し始めた頃だろう。
なのに凛はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどこで手に入れたというのだろう。

自分の知らなかった母の一面に洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。
だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上にビビらせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

ーーーーー　出ちゃえ・・・　そのままの格好でお外を散歩しちゃえっ！
内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。
あの日から自分の中に魔性が宿ってしまった、そう洋一は感じていた。
そいつが耳をふさいでも、目をつぶっても、ずっとささやきかけてくるのだ。
ーーーーー　絶対にバレないってっ。夜だし、コスもメイクもカン

ペキだし！
なぜか内なる魔性の声は、うら若い女性の声であった。

それはさておき。
あくまで自分基準だったが、割とよく似合っているのもまた事実。
それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとどめようが無い。
理性と言うか細い手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。
洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバーカウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけて一気に飲んだ。
そしてその瞬間に豪快に吐き出した。
洋一の口は、まるで農家のスプリンクラーにように、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。
「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」
あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。
手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。
それはアルコール度数９６。と言うウォッカであった。
もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。
おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしてはいない。
すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。
洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あはははははっ」
女装の快感にアルコールの多幸感が加わって、彼はヘラヘラと笑い出す。
お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

――――　この調子で酔いつぶれてしまえ！
メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、とっかえひっかえ飲み始めた。
バーボン、ラム、ウィスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。
凛のアルコールギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そうこうする内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がとろーりと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がってくる。
そうなると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。
なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。
わずか二日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う・・うふふふ・・・・あはははは」
よかれと思ってやったアルコールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。
ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまっていたのだ。
なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行っちゃおっか？」
心の中でつぶやいたつもりが声に出ていた。
もう完全に染まってしまっている。

「行っちゃえーっ！」
内なる魔性の声も、言葉となって口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪奢な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。
ずらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。
お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。
洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。
繁華街から少しだけ離れた通りを、ぽくぽくと行くメイドさんが一人。
左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。
夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人っ子一人いないわけではない。
薄暗いネオンの下を、大手を振って行進するメイドの姿は人目を惹いた。
ある者はヒューッと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおっと酒臭いため息をついた、
そんな人々の視線などお構いなしで、かっぽかっぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわぁ、愉快だわぁ、幸せだわぁ」
まったく客観性のない感想を口にしながら、にこにこと笑い続けて

いる。
そうやって裏通りを歩くうちに、ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目に映った。
「おじいさん、これを差し上げましょう」
笑顔で洋一は手に持っていたシェリーを押し付けると、おどろく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。
「ダメですよー、そんなに大勢で蹴ったりしちゃ。加減しなさい、かげん」
「あァ？なんだよねえちゃん。ヤっちまうぞコラ！」
凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが砕けるイヤな音がした。
「うわぁ！なにこいつ！？」「あぁ・・・見えた、黒いの・・・・」
残っていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。
「う、早い！・・・・」「おおっ！　今度はヒラヒラが・・・・」
その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まっていた会社員Ａさん（４５歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまったメイドさんを唖然とした顔で見ていたが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。
「メリメリっていったねー、あの子の顔・・・うふふ」
恐い事を可愛くいってからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。
職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。
「ちょい待てよおまえ！なにジロジロ見てんだよ」
振り返って蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

ニセフェミニストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れることを阻止したらしい。
少し考えてから、ひょいっと服の両袖をつまんだ。
一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が二本あらわれた。
それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。
並んで立つ少女たちの間を縫って、真後ろにあったバーのサインポールに刃物が突き立つ。
「こ、こいつなんかヤバい！」
笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーッと逃げ出した。
可愛く手を振ってそれを見送ってから、サインポールに刺さった刃物を抜いて袖の中にしまうと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフ～ン♪　あはははっ」
楽しくって笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。
危険なメイドの洋一は、そう思いながら手を振ってトコトコと歩いてゆく。
その後姿を、路地裏を横切っていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。
走る車のライトで照らされて、さっきよりその姿がよく見える。
ひたすら破滅への道を行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られることへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いている内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗った、地方にしか生息しない人たちが現れた。
ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を目に捉えた。
「あ、メイドがいる！」「うひょー！エロいぞこのやろうっ」「おねーさーん！俺らと遊んで」
欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振って答える。
その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起こさせた。

キーッとブレーキ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作ってやってくる。
「メイドさーん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかっこうで歩いてちゃ」
「そうそう、ヘンなことされちまうよー」
おまえらが今からやるんだろうが、と突っ込みたくなるくらい分かりやすいセリフだ。
なのに、なんのことだかわからないという顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくうなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。
「あ、逃がすな！」
振り返って追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止まると、道に止めてあったバイクや車のキーを片っ端から抜いて、「えいっ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。
男たちは、えっ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになって飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連続二発で三人を沈めると、くるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。
ーーーーー　残りは６人ねっ
だが心中のセリフは女性のままだ。
初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。
ちらっと振り返って、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すばやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。
次の男は木刀を持っていた。
上から襲ってきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを顎にお見舞いする。
木刀があればもう無敵だった。

「あっはははは！」
甲高い声で笑いながら洋一が、うっと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がってくる、電流のような気持よさに脳が麻痺した。
アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。
歩道には、いつの間にか何人もの野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドックン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。
それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。
ーーーーー　あ・・　なんかきそう、これ・・・・・
その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーッ！　うちの事務所の前でなにさわいどんじゃ！」
叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが見えた。
ーーーーー　あっ、シン！
その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。
逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。
木刀を投げ捨てると、洋一はダーッと走って野次馬の中に突っ込んだ。

「すっげぇ！メイドさん、カッコイイ！」「おねえちゃんやるなぁ」
「顔見せて！」
見物人の中をうつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降りかかる。
ーーーーー　ヤっべぇ！　とんでもねぇことしちまった
男にすっかり戻って深く後悔したが、すでに遅い。

スカートをひるがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかったが、今夜、彼は伝説の扉を開けてしまっていたのだった。

起動

どこかで電話が鳴っている。
ーーーーー　うるせー、誰か出ろよ早く！
眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思ってうなるが、電話の音は止まらない。
ーーーーー　誰もいないのか？　真子、綾乃、水音、出てくれ。・・・・・シン。おいシン、出ろ！

そこで飛び起きた。身体中が痛い。
どうやら床の上で寝てしまったらしかった。
座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があって、その中をのぞいた時、洋一はカッと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。
昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。
起き抜けだったが、頭はすばやく事態を把握していた。
ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」
爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえってきて、洋一は顔を真っ赤にした。
「・・・・兄貴？具合でも悪いんですか？すぐに迎えに行きますから、今いる場所を・・・・・」
「大丈夫だ、くるな！」
思わずそう叫んでしまってから、うっと言葉に詰まる。
いらぬことを口走ってしまったと、死ぬほど後悔したがもう遅い。
はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「・・・・・わかりました。大丈夫です、誰にも言いませんから。で、新しい彼女のところですか？」
「ま、まぁそんなとこだ」
「では秘密にしておきますので場所を・・・・・」
「それはダメだ！」
「えっ？」
「あ、いや・・・・・　この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねぇんだ」
「・・・・・兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」
「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」
「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません」
そう言われてもこっちも困る。
墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そうと洋一は必死になった。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かった。
「兄貴・・・・・　彼女とかではなくて、何か妙なことになってるんじゃないですか？」
彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。
「え、妙なことって？」
「病気とか」
おしい。半分くらい当たっている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。
なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけど」
「何か心配事でもあるんじゃないですか？」
「ないってそれ。　ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」
「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ？あれだし」
「それにしては声が微妙に震えておられますが・・・・・・」
おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だったが、じっと洋一は耐えた。

ーーーーー　シンには使いたくなかったが・・・・　しかたがねぇ、二代目パワーで行くしかない
ドスの効いた声で言った。
「おう、シン。てめぇ二代目の言うことうたがってんのか？四の五のいわずに言うこと聞けや！」
「・・・・・申し訳ありません」
「今から事務所に行く。おまえはそこで待ってろ」
わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればっかりはしかたがない。
洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入っていったのは午後5時だった。
シンと顔を合わせるのは気まずかったが、そこは彼も付き人。
しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終えると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。
責任はあるが、はっきり言ってメチャクチャ楽勝のお仕事内容である。
まぁこのポジションに上がるまでが大変なのだが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。
普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでいるようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかった。
前も、そしてあの時まで、ずっと。
だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクチェアに深く身を沈め、あごに手をあてて、アンニュイな表情で洋一は考え出した。
ーーーーー　まさかあんな世界があったとは、まったく知らなかったぜ
男である時とはまったく違う、見られることでの快感。
女性の物を身に付けることでの開放感。
そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるっていたのだが、昨夜は違った。
躊躇い無く放った前蹴りで砕いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうっとりとした。
また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになって、はっと口を閉じる。

変態を音速で通り越して、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。
ーーーーー　でも、ついに女装で外に出てしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃ・・・・・・・・
恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫びそうになって口を手で押える。
心臓が１６ビートで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。
一般人なら茨の道くらいだろうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。
しかもその段数は、絞首台へと上がる１３階段より短いと思われた。
じんわりと嫌な汗が脇の下を伝う。
しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まってくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。
ーーーーー　仕事もう終わったんでしょ？　行こうよこれから。ほら、すぐに。　まだ暗くなってないからドッキドキもんだよー！
洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。
ーーーーー　はぁぁぁぁぁ、もぉたまんないっ！
がっくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなっていたのだろう。
自分をじっと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。
二代目の影としてひっそりと壁の花と化しながら、シンはずっとマイ兄貴のことを観察していた。

――――　兄貴には絶対に何か困っていることがある！
忠実な付き人は今、そう確信した。
シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。
今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

玲

その日、玲(れい)は通っている女子高で奇妙な噂を耳にした。
放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残っておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。
また彼氏とかの話だろうとは思ったが、新聞部平部員ーーーーーだが実は部長を影であやつる真の支配者ーーーーー玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すんごいの見ちゃったぁ」
「なによ、またしょうもないことでしょ？」
「ちがうってば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし」
「はぁ？　それってアニメかなんかの話？」
「だーかーら、ちがうって！リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいってて、そんで2時くらいだったかなぁ、アーケードの裏を通って帰ってたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思ってたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだったんだけどね。まきこまれんのイヤだったから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやったのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーッて逃げ出していなくなっちゃったの」
「それって、メイドさんがなんかやったわけ？」
「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうって思って、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たとこで、ハルオさんとこのチームが走ってきて」
「うわっ、あのタチ悪い人！」
「そそっ。たぶんあれはあの子さらってなんかする気だったんじゃないかなぁ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃったの」

聞かされている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めちゃくちゃ強いんだって、それが。たぶん空手か拳法だねあれは。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思う。で、全員やっつけちゃって、そのうちにヤっちゃんまで出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。ヤっちゃん出てきたとこでメイドさん逃げちゃっておしまい」

「ふーん・・・・　まぁ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、ニヤニヤと笑って立ち上がると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それ！ちがうって、マジ話なんだってばー！」

しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて二人を見送って、玲は考えた。

ーーーーー　ほんとかな？　たしかあの子、漫画描いてるっていってたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐってみるかなっ

机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。

午後１０時。
自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになっている店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入っていっては、ネタになりそうなものを物色した。
高校に入ってすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合って、雑誌作りの真似事をするようになった。
そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助っ人ライターとして、編集長の覚えも高かった。
この仕事を手伝いだして知り合った人たちも、活発で妙に人懐っこいこの娘のことを、子ども扱いせずにかまってやり、ささいな街の情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。
肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびとした足取りでその健康的な身体を運んでゆく。
あちこちに顔を出す内に、あっという間に日付が変わって、玲は少しあわてた。
ーーーーー　やばっ！　そろそろアーケードの方にいかなきゃ
広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言うと、玲は急いで表に出た。
アーケードへと早足で歩きながら、さっきスポーツバーのマスターに聞いた話を思い出していた。

そこのマスターが、野次馬としてメイドさんを目撃したと言ったのだ。
「いやぁ、凄かったよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハーフかと思ったくらい綺麗な顔してんのに、木刀持って男をメッタメタにしちゃってさぁ。あれって絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなぁ。行ってみたいなぁ、俺」
思い出す内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。
ーーーーー　空手に拳法。おまけに剣道ねぇ・・・・・　おもしろいじゃないっ！

この平和な地方都市では、１０年に一度あるかないかというネタだ。
話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい波を起こせるかもしれない。
自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になって、
玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。
肩から下げたバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入っているのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

レディ・チャイナ　1

午前1時。
人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めぼしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。
ーーーーー　あぁ、せめて酒が見つかってりゃ、ちっとは飢えもしのげるっていうのによォ・・・・・

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルッと身を震わせたその時、前を通り過ぎようとしていた足音が止まった。
すわっホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバッと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわぁ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たって下に落ちる。
次に、ガチャンとガラスの触れ合う音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなってきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しは温まると思います。どうか気を落とさず。　きっと楽しいことがありますよ・・・・・・」
地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声がした。

まだ固まっている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。
そっと目を開けて、自分の身体に当たった物を手にとってみると、

それはあたりめの袋。
暗闇で見えなかったが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き系おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まった袋があったのだ。
なんだかわけがわからなかったが、危険は無いと悟った辰さんが、おっかなびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去って行く、派手な後姿が見えた。
真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繍で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。
左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。
やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、己の足を殴ってあの部屋に行くのを止めようとした。
だが、ただ痛かっただけで、足は普通に母のマンションのドアをくぐっていた。
今度は、手を押えて女装を止めようとした。
しかし、気が抜けて鼻をほじった瞬間に、女装が始まってしまった。
せめて部屋の中で我慢しようと試みたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついうっかり傍にあった酒を飲んでしまって、全ては終わった。

――――　そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持っていってあげよう！
そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。
差し入れが、あたりめや酒だったのは、かけらほど残っていた男と

しての本能がチョイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によって、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だというのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化しているこの男はいったいなんなのだろう。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振って――――今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々とだったが――――中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行こうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。

やがて行く道が決まったのか、優雅に扇子を仕舞うと、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りでうたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キャッチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。
やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。
信号待ちをしながら考える。

ーーーーー　やっぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？
考えている内にパッとシグナルが青に変わった。
くるっと９０。ターンすると、玲は右へと足を向ける。
繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのようだ。
タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。
この国道は、さきほど玲が渡らなかった交差点から、彼が初めに出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしっている。
昨夜、洋一が暴れた国道とつながっていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。
この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。
それでも彼の姿は人目を惹き、酔客から好奇の視線がそそがれた。

自分を見つめる者に、嫣然とした微笑で洋一はこたえている。
その笑顔を見て、ある男は鼻を伸ばし、ある若者は実らぬ恋に落ち、あるおとうさんは、恍惚のあまり家族土産の寿司の折り詰めを道におっことしてばら撒いた。
それを見て、洋一の快感ボルテージはどんどんと上がってゆく。

ーーーーー　きっもちいぃ！！
まさか自分を探している不届き者がいるとは夢にも思わない彼は、こみ上げてくる心地よさを隠しきれずに、甘い吐息をつきながらゆっくりと歩いてゆく。
だから、普段の洋一ならすぐに感づいていたはずの視線を察知しそこなっていた。

ちょうど彼の１００メートル後方。
奇しくも洋一の組が経営する高利回り金融の看板の陰から、熱い視線でこちらをうかがっている男がいた。
「まさか兄貴がこんなことになっていたとは・・・・・・・」
頬を赤らめながら洋一の背中を見ていたのは、口調が示すとおり、忠実な付き人、冴島　心であった。

シンの尾行は、洋一が事務所を出たところからもう始まっていた。
彼の追跡がまったくバレていないのは、洋一の脳容量の９９％を女装が占めている証であろう。

シンは始め、知らないマンションへと入ってゆく洋一を見て、やはり新しい彼女のところだったかと思ったが、やがて出てきた兄貴の姿を見て、何事にも動じない彼が持っていたカフェラテのカップをボトリと取り落とした。
ちなみにシンは酒も好きだったが、甘い物はもっと好きだった。
ドクドクと流れ出す甘ったるい香りに囲まれながら、シンは己の目

を疑い、何度も何度もこすって確認した。そのために目が真っ赤になった。
ーーーーー　間違いない、兄貴だ・・・・・・　姿形が変わっていても、俺が兄貴を見まちがうはずがない
そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実に、シンは身体が震えてくるのを感じた。
だが、全てはちゃんと見届けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけてきたのだった。
そうやってついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。
ーーーーー　おや、まだ身体が震えている。　もう落ち着いているはずなのになぜ？
そういえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。
しばらく変調を不審に思っていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入った。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」
ある国の原住民をおもわせるメイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。
「牛島さん、こいつっス！俺ら襲ってきた女は」
ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそうささやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。
脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのはこいつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかしげて考え込んだ。
が、やっぱり思い出せないので、ロンリコをぐいっと一口飲む。
そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるように身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。
身長１６８ｃｍの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。
短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張った顔にはいかつい髭がたくわえてあった。
ごつい身体と相まって、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。
凄むわけではないが、やる気満々という空気を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。
だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。
よく見ると、目は厳しいままだが大きく見開かれていて、口がＯの字を作っている。
おどろいている表情だった。
そのうち、ごつい身体がプルプルと震え始めた。
手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでやってしまわないの？」という非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。
声は渋いバリトンであった。
「か、かわいい」
「えっ？」
ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。
「つ、つきあってください、ぼくと」
「マジ？」
また二人が同時に声をあげた。
彼らの思惑と１８０。違う展開についてゆけないようだ。

「ひとめ惚れなんです、お願いします！」
もう二人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシラフに戻った。
野獣のような男にいきなりカミングアウトされても－－－－－たとえイケメンだったとしても同じだろうが－－－－－気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一歩前に出る。さすがの洋一もこれには半歩下がらずをえない。
「ど、ドライブいきませんか？」
「・・・・・・・イヤ」
「じゃ、飲みにでも」
「・・・・・・・ムリ」
「それではちょこっとだけお茶でも」
「・・・・・・・てかウザい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。
殴り飛ばすわけにもゆかずに下がる洋一。
だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。
彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。
チャイナドレスのスリットが割れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上へとあげられるのと、その足の奥にある物を。

――――　わぁ・・・・しろい・・・・・・！
牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にピンヒールがめり込んだ。
直線から鋭く真横に飛ぶ、必殺の回し蹴りだ。
あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思われたが・・・
彼はやはり体格通りの猛者であった。
首を少し曲げただけで姿勢も崩さず、その身体は微動だにしていない。
それどころか顔はまだ笑ったままだった。

牛島の手が、まるで愛おしいものに触れるようにそっと足首を捕らえた。
その感触に、ヒッと洋一が悲鳴をあげる。

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出した。
その目の前で、洋一の身体が華麗に空を舞った。
掴まれた足を支点にして躍り上がると、空いていた片足から牛島の顔面へと膝蹴りを放ったのだ。
「変形真空飛び膝蹴りっ！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。
モロに決まった膝に牛島が鼻血を噴出すと、その隙に掴まれた足をはずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫っスか！」
そう言って近寄ってきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、牛島は叫んだ。
「逃がさん！おまえは俺の女だぁ！」
その言葉にかっとなったシンが、牛島に走り寄ると思いっきり拳を顎にたたきつけた。
これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかまわず、シンはマイ兄貴の後を追って走る。
だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせって闇雲に路地裏へと踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶっ倒れている彼氏と牛島を見下ろしながら、何が起こったのか理解できずに呆然とするのだった。

レディ・チャイナ　2

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。
その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走っただろう。
もう追ってはこれないだろうと立ち止まると、荒い息を整えつつ、さっきの出来事をフィードバックした。
ーーーーー　うはぁ、久々に男に迫られてビビったぁ！　でも会って１０秒で好きですはないよねぇ、歌の文句やマンガじゃないんだし

幼少期から青年期までに自分に言い寄ってきた男どもと牛島がオーバーラップして、洋一はうげっと顔をしかめた。
それ以上おもいだすのは辞めにして、ロンリコをごくごくと飲み干す。
煙草が吸いたくなってきた。
だが全て部屋に置いてきてしまっていたし、さすがにコンビニへ買いに行くのは、わずかに残っている理性が止めてと言っている。

ーーーーー　明日からはバッグ持って出よっとっ
この男、もうためらい無く女装お出かけを日課にしようとしている。
人生のがけっぷちに爪先立ちしていることを、洋一はすっかり忘れてしまっていた。

しかたかない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと彼は歩き出した。
すぐにタクシーがたくさん並んでいる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。
この道をまっすぐ西へ行けば、左手にさっき出てきた地下街の入り

口がある。
洋一は空になった酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。
その時・・・・・

「みつけたぁ！」
野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハァハァ肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。
恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまったらしい。
絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。
道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まっていたが、牛島が間合いに入ったのを見てさっと車道に飛び出すと、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。
「絶対に逃がさん！」
牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。
突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。
いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかってきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。
ホームレスへの差し入れと合わさって、これは女装状態での一現象と言えるだろう。
追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひょこっと女の子が出てきて、モロに二人がぶつかる。
ヒールを軸に洋一はかかしのように回って吹っ飛び、女の子はどしんと尻餅をついた。
「痛っ！」
「ごめんなさい！」
シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上がると、女の子の出てきた方へと身をひるがえして走り去る。
こっちもなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクッとすくみあがった。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。
「どっちいった？チャイナの人どっちいった？」
「あ、あっち・・・・・」
その迫力に負けて、つい女の子が去っていった方向を指差すと、スチームのような鼻息を吐いて、大男はそっちにむかって駆け出した。
数秒、女の子は唖然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかとおもうと、大男の後を追って走り出した。

ーーーーー　いつもメイドとは限らない。さっきのが噂の人だ！
記者のカンがそう告げている。
カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女の子。
もうおわかりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。
アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。
それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。
頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。
次に熊、そして少女。　もとい、洋一、牛島、玲だ。
三人の姿は、まるでスクラップスティックな映画の1シーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。
「お、お名前を！」「イヤッ！」「じゃ、住んでるとこを」「もっとイヤッ！」
コメディを演じながら駆ける二人の後ろでは、真剣な表情をしてバッグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あっ」
突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもうと、アスファルトの上を転がった。
彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。
肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ちふさがる。

「さぁ行きましょう・・・　今すぐ・・・・・・」
あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄ってくる。
その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。
ふたたび高まるバイオレンスの予感。
だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「そこの男どいて！　影になってて写らない！」
「えっ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面スレスレまで沈んだかとおもうと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。
だが洋一は、瞬時に牛島の懐に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底突きを放ったのだ。
拳での打撃と違って、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。
牛島の目がくるりと裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿が玲の前にあらわになった。

ーーーーー　チャンスッ！
構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、チャイナの女。
玲は1チャンス1ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終を見ていたシンがつぶやく。
「玲・・・・　なんでおまえが・・・・・・・・」
湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となって動きを止めたのだった。

兄妹　1

牛島騒動からしばらくたったある日。
いつも通りに事務所にやってきた洋一は、デスクに陣取ってゆったりとシンの淹れてくれた紅茶を楽しんでいた。
あの騒動の翌日、持病の痔が急に悪化した父・義隆の代参として神戸に行っていた洋一は、ひさしぶりに女装ができるとワクワクしている。
ひさしぶりといってもわずか一週間なのだが。

――――　今夜はなに着よっかなぁ。メイド、チャイナときてるから、次も定番の和服？　いやでも、和服は髪をアップにしなきゃ決まんないし・・・・・・・

そんなことを考えている目の前で、お盆を片手に、シンが沈鬱な表情でたたずんでいる。
「おうシン、どした。なんか話でもあんのか？」
「いえ・・・・別にありません。失礼します」
表情を消してシンは、いつもの丁寧な礼をして部屋を出て行った。

「なんだあいつ・・・・・　妙な顔してたな」
そういぶかしがる洋一が、ティータイムを再開しようとカップに目を向けたとき、デスクの先、ちょうど入り口との間の床に紙が一枚落ちているのが見えた。
何気なく立ちあがって手にとってみると、それは毎週この街で発行されているタウン情報誌だった。
シンが落としていったのかと思い、興味がでて中に目を通してみると、ほとんどが店舗のＰＲやクーポン券で占められている、どこにでもあるパンフレット風の冊子であった。

紅茶を口に運びながら、何の気なしに後ろのページの占いなどを見ていたが、つまらないのでもう一度パラパラとめくって捨てようとしたとき、大きなあおり文句とスナップ写真が目に留まり広げてみた。
その途端、洋一の口からダラダラと紅茶がこぼれだした。

「ＷＡＮＴＥＤ！
ワルと戦う　戦闘コスプレお姉様！」

大きなゴシック体でそう書かれた下には、スリットから白い足を覗かせて駆け去る、真紅のチャイナドレス姿の自分がいた。
そのまた下に小さな活字で、洋一がこれまでに起こしてきた事柄が克明に記事として書いてあり、末尾の言葉はこう結ばれていた。

「この女性の情報を編集部では求めています。ささいなうわさでもＯＫ！電話・ＦＡＸ・メール等でお送りください」

ジノリのティーカップを持つ手が震えているのを感じながら、洋一は口中の紅茶を全部吐き出してそこに立ち尽くした。

「玲ちゃんすごいよ反響が！こんなになるとは思わなかったな俺」
「ねっ、あたしの言った通りでしょ？　絶対にこれ当たるって」

送られてきたお姉様情報のメールの数を見て、玲は得意そうに胸をそらせると、タウン情報の記者にそういった。

彼女の目論見どおり、平和な街の退屈に飽きていた人々から、たくさんの戦闘お姉様に対する有象無象の情報が送られてきた。
その内容はどれも玲の集めた情報の域を出ないものだったが、自分の記事が大きな反響を呼んで、彼女の心はワクワクとはずんでいた。

「続報も頼むよ、玲ちゃん」
記者は笑顔でそういうと、またかかってきたお姉様情報の電話へと対応しはじめた。
「はい、まかせといて！」
そう元気よくこたえたとき、ポケットの中でケータイが振動した。
見ると兄からの着信である。
ピッとボタンを押してでた。

「兄ちゃんめずらしいね、自分からかけてくるなんて」
「・・・・・玲、ひさしぶりだな」
彼女の耳に爽やかなアルトの声が聞こえてきた。
「どしたの、なんかあった？」
「いや、これから会えないか？」
「うん、いいけど・・・・・・・　どしたの？兄ちゃんから電話で会おうなんて、なんか不思議」
「会ったときに話す。今どこにいる？」
「タウン情報の編集部。兄ちゃんには言ってなかったけど、あたしライターやってんだよ。さっきもさぁ・・・・・・」
「知ってる。じゃあ今からいうところで待ってるから」
玲の言葉を途中でさえぎると、兄は編集部近くにある喫茶店の場所を彼女に伝えてから電話を切った。
いつもと違う兄の態度に玲は首をかしげたが、まぁ会えばわかるよ

ねと、編集部の入っているビルを出ると、軽い足取りで歩き出した。

待ち合わせの店へと行きながら、兄にも戦闘お姉様のことを聞いてみようと考えていたとき、ふと気がついた。

ーーーーー　あれ？　あたしがライターやってるの知ってるっていってたけど、なんでかな？

玲の親でも知らないことを、家を出ている兄が知っていたというのがおかしかったが、人に大っぴらに言えない職業だからどこかできいたのかもと軽く思いなおして、早足で歩道を歩き出した。

兄妹　2

その夜、洋一は母のマンションでうなだれて考え込んでいた。

ーーーーー　どう考えてもマズいよね、また女装で街に出るのは・・・・・・

ため息を一つついて、テキーラのグラスを傾ける。

だが、今夜も彼はバッチリ女装していた。

青と白を基調に、胸元に豪華にフリルをあしらったブラウス。　パニエで大きく膨らませたフレアースカート。

首には臙脂色のリボンタイを締めて、不思議の国のアリス風メイドであった。

だがそれだけではない。

今夜の彼の頭の上には、なんとネコ耳カチューシャが装着されていたのだ。

そのなんとも言えぬ困った空気を醸し出している姿は、もはや女装などと簡単にくくれないほど複雑怪奇で、まさに「変態！」としか形容しようがない。

トドメはそばに置かれてある、手持ちの小さなトートバッグだった。

中味は煙草とケータイ。

「出る気満々やないかい、ワレ！」と読者諸兄は突っ込まれるだろうが、まずは彼の言い訳も聞いてやって欲しい。

心の病だかなんだかわからないが、ここで女装お出かけを辞めてしまうと、ストレスで稼業の方にも影響が出てきて、きっととんでもないヘマをやらかしてしまうだろう。

というか、そもそもまず出てゆくことを止めるのが不可能に近い。

しかしこれもまた不思議だが、なぜか俺はタウン誌にマークされている。
だから目立つ格好でのお出かけはもう辞めよう。
地味なＯＬかホステスっぽい格好でならマークもかわせると思うから、これからはそれで我慢することにしよう。

コメント不能なムチャクチャな理論だったが、いちおう結論らしきものが出て、洋一は立ち上がるとキッと顔を上げて叫んだ。
「よし、だから今夜は最後のメイドナイトだ！」

バッグを手にすると、洋一は玄関へと小走りで駆け、用意しておいた黒い厚底のシューズに足を通して、ドアを勢いよく開けて外へと飛び出していった。

まるっきり正常な判断ができなくなっている洋一から少し時間を戻そう。

太陽が沈みかけ、街が紫色に染まる夕刻。
待ち合わせの喫茶店へと着いた玲は、目立たない奥まったボックス席に座っている兄の姿を見つけて手を振った。
軽くうなづいて答える兄。
もうお気づきかとおもうが、それは紅椿一家二代目付きのシンだった。

「わぁ、兄ちゃんの顔みんのひさしぶりだぁ。元気だった？」
にこやかに笑いながら玲はシンの前の席に座ると、注文をとりにきたボーイにミルクティーをオーダーする。
「ああ元気だ。すまないな、急に呼び出したりして」
「ううん、別にいいけど。それよりどしたの？あたしに話なんて初めてじゃん」
無邪気に話しかけてくる妹から目をはずすと、シンは言いよどんで黙り込む。
静寂が訪れ、しばらくは店内を流れる小粋なジャズだけが、二人の間に漂っていた。

ミルクティーが届くまでたっぷりと黙り込んだあと、おもむろにシンは切り出した。
「今週のタウン誌の記事を書いたのは玲か？」
なぜ知っているのかと玲はいぶかしんだが、こくりと一口ミルクティーを飲むと、軽くうなづいた。
「うん、そうだけど。なんで兄ちゃん知ってんの？」
「あの記事に載っていた人をこれからも探すのか？」
質問に質問が返ってきた。
いつもの兄とは違う、性急な物言いにとまどいながら玲が答える。
「うん。　さっきも編集部に顔出したらすんごい反響でね、電話やメールもバンバン来てて。記者の人にも続きよろしくって言われちゃってさ・・・・・」
「それ、やめてくれないか？」
言葉をさえぎられて、おどろいて玲はシンの顔を見つめる。
玲に対して優しい笑みを絶やさなかったシンが、真剣な目をして自分を見ている。
その表情で気がついた。
「あの人って兄ちゃんの知ってる人なんだ・・・・・・」

今度はシンがおどろいた顔になり、息を飲んで目をそらせる。
「兄ちゃんの彼女か好きな人なの？」
玲の問いかけに、兄の肩が小さく揺れた。
「やっぱそうなんだ。　それで・・・・・・」
「ちがう！　あの人はそんなのじゃないっ」
おさえた声音だったが、玲がビクッとしてしまったほど強い否定の声だった。

またうつむいてしまった兄の姿を見つめながら、玲は思う。
ーーーーー　ふーん・・・・　でも兄ちゃん。ちがうっていってもその仕草じゃバレバレだよ
まぁその辺はあまり刺激しないようにしようと冷静な判断を下すと、玲は話を進めだした。

「それはいいとして。知ってる人なのはほんとでしょ？で、なにか事情があって正体がバレると困る人」
そういったとき、一瞬だけれどシンの口元がイーッとゆがんだのを玲は見逃さなかった。
片目をつぶって、少し上目遣いに兄を観察しながら、カップに口をつける。
「兄ちゃん言いたくないんだろうけど、その事情を話してくれないとこっちも困るわけ。これでもちゃーんとお金もらって記事書いてるの、あたし。だから高校生だからっていいかげんな仕事はできないの。兄ちゃんヤっちゃんだから、仕事のケジメってよくわかってるよね？」

理詰めできた妹の言葉に、シンは額に汗が浮かんでくるのを感じた。
ーーーーー　こ、こればっかりは言えない・・・・・・　でも話さないと、この強情な妹は絶対に兄貴を追うのを止めないだろう
パラドクスな問題に、シンは苦渋に満ちた顔をした。

そんな兄の姿を、玲はまるで実験を見守る科学者のような目で見ながら、また話し始める。
「それにライターとして聞くわけだから、秘守義務ははちゃんと守るし、もちろん興味本位とかはいっさいなしよ。その人の生活に影響が出そうなら、記者の人に話して止めることもできるし」
はっとシンが顔をあげる。
その目に希望の光を見て取って、あと一押しと、玲は一気にたたみかけた。

「それに・・・・・・」
「そ、それに？」
「兄ちゃんあたしが信用できないわけ？兄ちゃんヤクザになってあたしやみんなに迷惑かけたけど、あたしが兄ちゃんに迷惑かけたことある？」
「ない・・・・・・」
「なら話しなさい！悪いようにはしないから」
肉親の情と兄の罪に訴えた、本職のヤクザも顔負けの、アメとムチの使い分けが絶妙な交渉であった。
シンより妹の方がその道にむいているのかもしれない。

証拠の凶器を目の前に置かれた容疑者のように、がっくりとシンは肩を落としてうなだれた。
玲が目でもう一度うながすと、兄は二代目の女装のことをぽつぽつと語り始めたのだった。

戦闘輪舞　―バトルロンド―　1

そして時はまた戻って・・・・・

マンションのエントランスから出てきた洋一を見て、シンはうっとうめいた。

「あ、兄貴！　それはいったいどんなお姿で・・・・・・・・・！？」

「アリス風メイドね。よっぽど自信ないと決まんない服だからあんまし一般的じゃないけど。　てか、あのネコ耳が意味不明」

「そうじゃなくて！　なんであんなお姿に・・・・・・・　それにちゃんとあの冊子を落として警告したのになぜ」

「知らないよそんなの。好きだからでしょ、きっと。ああいうのは自分じゃ止めらんないもんなの！　それより兄ちゃん、いくよ」

すっかり兄妹の立場が逆転していたが、そのことに気づかないシンは、玲の後について洋一の追跡を開始した。

あの後、洗いざらい打ち明けた兄に妹は言った。

「ふーん、そういう事情ならこっちも考えるけど・・・・・・・　でも兄ちゃん。あたしが記事にしなくっても、このままあの人があの格好で出歩いてたら、絶対に噂はおっきくなるよ。もう火はついちゃってるわけだし。　その二代目だっけ？その人にちゃんと話して辞めさせる方が先じゃない？」

「それはできない！つらい稼業の息抜きで楽しんでらっしゃる行為を舎弟に見られて説教されたなんてことになったら、もう兄貴のメ

ンツは丸つぶれ。俺も組に、いやあの人のおそばにいられなくなってしまう」
「へぇ～、いろいろとめんどいのねぇ、ヤっちゃんも」
火をつけたのは自分なのに、まるっきり同情していない口調で玲はそういって、冷えてしまったミルクティーをまずそうに飲む。

そして、うーんと顔を上にあげて考え出した。
「こっちから言えないとなると・・・・・・・・　そだ！あたしがあの人に言うってのはどう？」
「えっ」
「もう、にぶいなぁ！　だから、あたしがあの人の決定的な瞬間を捉えてから、出てってはなすわけ。それならあの人も兄ちゃんもダメージ少ないっしょ？だってあたし赤の他人だし」
「そ、そうかなぁ？」
「じゃ、ほかにいい方法ある？」
黙り込んだシンを見て、玲は言ったのだ。
「決まりね。今夜から兄ちゃんとあたしであの人を尾行よっ。今度は必ずチャンスつかんでやる！」
「おい。それなんか意味ちがってないか？」
兄の言葉はもう妹には届いていなかった。

そして兄妹は今夜、洋一の後をつけているのだ。
「また街に出て行かれるのだろうか」
「うーん、そうだとしたらそうとーキテるわね、あの人」
そう話す二人の前、１００メートルほど先で、チラリチラリと青白いスカートが揺れている。

その光景にゴクッとつばを飲み込むシンを見て、玲は目をイヤそうに細めていった。
「てか兄ちゃん。　ほんとはあの人のこと好きなんじゃないんでしょうね？」
「バカ！　兄貴は男だぞ」
「そうだけど・・・・・　なんか兄ちゃんの反応がおかしいから」
「俺はノーマルだ。その気はない」
玲は、ふーんとまだ納得せずうなりをあげていたが、洋一の姿が角を曲がって消えたので、いそいで間を詰めて走った。

ぽくぽくとアリスメイド洋一は夜道を歩いてゆく。
その足は繁華街とは別の方向へと進んでいて、少しだけシンは安心した。

やがて洋一は、街の中心から少しはずれた市民公園へとたどり着いた。
入り口の逆Uの字の柵のあいだを通って、彼の姿は闇の中へと消えてゆく。

深夜の公園なので人影はない。
ここでは騒動など起こるはずがないとシンが胸をなでおろしたとき、洋一の目の前にバッと黒い影が現れたのが見えた。

何か二言三言はなす声が聞こえてきて、シンが前に出ようとしたら、

影がものすごい勢いで真横に吹っ飛んで倒れた。
それを見て唖然としたが、当の洋一は、もう後ろも見ずに鼻歌をうたいながら歩き出している。

二人にはよく見えなかったのだが、黒い影は痴漢で、隠れて獲物を待っていたところ、おいしそうなメイドさんが現れたのでこれはラッキーと飛びついて、したたかに洋一に殴られたのだった。
凶器は、左手に持ったテキーラの瓶であった。

なんだかよくわからないが、シンはなぜか用意していたロープで男を縛り上げて転がし、玲が手帳に「この人変質者でーす！」と書いたページを破って背中に貼り付けた。
その作業を一分とかけずに終わらせて、また尾行を開始する。

アリス洋一が公園を出てゆくまでの一時間の間にその被害者は三人にもおよび、深夜の公園でのコスプレ姿がいかに危険であるかを知らしめた。
どいつも一撃で仕留められていたので、玲が出てゆく暇も無かった。

洋一は公園を後にすると、トコトコと歩いて、２４時間営業の大きなリカーショップへと入っていった。
どうやら酒が切れたらしい。
面が割れているシンは出入り口の影に待機して、玲が中に入った。
彼女は大胆にも、たくさんの酒が並ぶ棚を一つ一つ吟味している洋一の後ろまで近寄っていって観察した。

ーーーーー　メイクがイマイチね。明かりの真下でよく見たら、男ってわかっちゃうかも
しかしとても３０男でしかもヤクザには見えないな、などと思いながら、ゆっくりと後ろを通り過ぎた。

チラッとカウンターの方を見ると、レジに立っている男が、好色そうな顔をほころばせてメイドさんを見ているのがわかり、ムッとする。

ーーーーー　なんでかわいい女の子のあたしじゃなくて、女装男の方を見るかな、もう！　メイド服に騙されちゃって・・・・・・　これだから男はバカね

世の男性にはあまりに酷い感想をつぶやくと、玲はまた洋一の方を見た。

彼はバーボンの銘酒・ブッカーズを手にしてレジへむかっていた。

そして支払いを済ませて店を出てゆく。

店員の顔は最後までほころんだままで、まったく洋一の正体には気がついていないようだった。

外に出た洋一は、店の駐車所の奥の暗がりまで歩き、フェンスにもたれかかると、ブッカーズの封を切ってグビリと一口あおった。
そして酒瓶を下に置き、バッグから煙草を取り出し火をつけた。

口から吐き出された白い煙が、漂うそばからすぐ消えてゆく。
なにやら納得がいかないといった表情をしていた。
―
――――　うーん・・・・　やっぱ公園とか店はつまんないなぁ
煙草を口に運びながら洋一は考える。
そして、やはり街を歩きたい、そう思った。

洋一は、盛り場のあの猥雑な空気が好きだった。

そこにはたくさんの種類の店があり、またそれ以上に様々な人々がいる。
その二つが醸し出す妙にウキウキとした、けれどもどこか少しあやうげな香りがする、夜の街が彼は好きだった。

だが、そこへこの姿でゆくことはもうできない。

そこまで思って寂しさにうつむいた時、洋一の頭の中で魔性の声がした。
――――――　またお酒買ってホームレスの人たちに持っていってあげようよ。それだけやって帰ればきっと大丈夫だってっ
甘い甘い誘惑の声であった。

じんわりと快感がこみ上げてきて、洋一は自分の身体を抱いた。
もうダメだった。

しばらくそうして震えていたが、やがて店へと取って返して大量の酒とツマミを買い込むと、洋一は地下街への道を颯爽と歩き始めたのだった。

地下街に天使が舞い降りた。

ふいにやってきた美しいメイドに、そこに住む人たちはおどろいたが、彼女が前に酒とあたりめを投げ込んで消え去ったチャイナの女だと気づいた辰さんが、仲間にそう説明したので、みんな警戒をといて集まってきた。

冷たい夜風に震える人々に惜しみなくアルコールを配り、嫌がることなく輪の中に入って話を聞くメイドさんに、彼らは神性を感じた。

「こないだはありがとよ、お姉ちゃん。今夜もこんなに差し入れ持ってきてくれて」
「ねえちゃん色が白くって彫が深いけどハーフかなんかか？」
「いける口だねぇ、ほらドンドン飲んでっ」
突然はじまった深夜の宴の中、人々は口々にメイドさんに話しかけ、彼女もまたそれに笑顔でこたえた。

口数が少なく、その正体もわからないけれど、事情があってここに住む自分たちにちゃんと接してくれるメイドさんに、みな好意を抱いている様子だった。
冷たい世間の風もその周りを避けてゆくような温かい宴はずっと続くかにみえたが、終わりも突然やってきた。

「おぉ一っ！今夜はメイドさんがいるよォ」
あざけるような声が宴の輪の外でした。

声のした方を見ると、5人の若者が手にバットや木刀といった物騒な物をさげて、こちらを向いてニヤニヤと笑っていた。

先頭に立っている長い金髪の男が、手のひらに特殊警棒をピタピタと叩きつけながらいった。
「かわいいねーメイドさん。俺らといっしょにこの臭いのいじめて遊ばない？」

男たちの発する負の空気におびえて、ホームレスたちは後ずさりしながら固まってゆく。
「街のおそうじ屋さんさ、俺らは。　こうやって！　汚いのを！　かたづけてさ！」
シャーッと音をたてて警棒を伸ばすと、男はゆがんだ笑い声をあげながら、ダンボールハウスを一つづつ潰してゆく。

「うわぁぁぁ！」
一人のホームレスが恐怖に耐え切れなくなり逃げ出した。
木刀を持った男がすばやく走り、地上へと続く階段に逃げたその影に斬りかかる。
鈍い音がして、悲鳴が暗い闇から響いてきた。

警棒の先をメイドの顔にむけて、金髪がいう。
「それともなに？　あんたも偽善者でこいつら守る方なわけ？」
男がうつむいたメイドの顔をあげようとした時、冷えた声がした。

「・・・・臭いねぇ」
「あァ？　そりゃ臭いさ、ここは」
そう答えた男をあざける高い笑い声がメイドの口から飛び出す。
そしてよく光る目で男を見据えて言った。

「いくら香水振りまいて隠しても、消せないくらいバカなガキの匂いがして臭いっていってんのさ」
彼女の押し殺した声に、男たちの笑いが止まる。

メイドはゆっくりと立ち上がった。

「ハッ！おもしろいこと言うね、おねーさん。　じゃ、おじさんたちの後で遊んだげるよ。　俺、気が強い女が泣くとこ見んの好きなんだぁ」

鼻で笑いながら言った金髪の言葉に、後ろの男たちがククッと笑った時、メイドの左手に光るものが現れたかとおもうと鋭く横になぎ払われ、同時に右手が閃いた。

金髪のズボンの股間が切り裂かれ、バットを持っていた男の顔面に焼酎の瓶が突き刺さる。
次の瞬間にはもうメイドの身体は金髪の懐へと飛び込み、人差し指と中指をコの字に曲げた拳が鼻下の急所に炸裂した。

吹っ飛んで倒れた二人にかまわず、木刀男が走りこんできて、メイドの頭を狙って上段から打ち下ろす。
逆らわず、かえって進んでそれをかわして相手のみぞおちを狙う彼女に、手元に鞭のように引き寄せられた木刀が、鋭い突きとなってまた襲いかかる。

あきらかに剣の心得があり、しかも暴力に慣れた動きだ。
首だけでそれを避けて、さっとメイドは後ろへ飛んだ。

さっきまで彼女がいた空間に、チェーンが叩きつけられる。
連携のとれた動きに、残る男たちもかなりの手錬れだと思われた。

木刀が正面を、チェーンが右後ろ斜め。そして真後ろをナイフの男が固めてメイドの動きを封じる。
どの男の顔も人をいたぶる悦びに歪み、そして醜い笑いを張り付かせていた。
不穏な空気がまた高まってくる。

三人が一斉に仕掛けた。
わずかにナイフの動きの方が早いと見たメイドが左へと飛んだ時、そこへ木刀が待っていたように振り下ろされ、それをかわす少しの動きの間に、彼女の右手にチェーンが絡みついた。
かろうじて後ろのナイフを蹴り上げてかわす。

左を開けておいたのも、三人の攻撃のズレもすべて罠だった。

鉄でできたチェーンはどういう仕組みなのか、メイドの腕に絡み付いて離れない。

「ちょっと！　服汚したツケ、高いわよ」

動きを封じられてもなお、メイドは不敵にそう叫ぶ。

囲む男たちはニヤニヤと笑っているだけだ。

誰も口をきかないところが、かえって隙がないことを感じさせて不気味だ。

「兄ちゃん、これヤバいって！」

階段で木刀に襲われた男を介抱しながら下を見ていた玲が、隣のシンの腕を引いてそういった。

出てゆこうか迷っていたシンが、もはやこれまでと足を踏み出した時、また三人が動いた。

チェーンが強く引かれ、腰を落として耐えたところへナイフと木刀が斬りかかる。

どちらかが動きのとれない彼女に当たると、玲は目をつぶった。

その刹那、メイドの左手が二度光った。

斬りかかる寸前でナイフと木刀の動きが止まり、フリーズしたような一秒の間の後、二人がどっとその場に崩れ落ちる。

気絶した二人の顔のそばには、細長く光る短刀のような物が落ちていた。

「兄貴の小柄術だっ。初めて見た・・・・・・・・」

唖然としてシンがつぶやいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5587y/

女装天女！

2011年11月25日18時57分発行